

第 3 回 展 示

明 治 の 留 学

— 井上家文書を中心に —

平成 3 年 10 月 29 日 (火) ~ 平成 4 年 3 月 1 日 (日)



もんじょかん
徳島県立文書館

明治時代の留学

日本の留学史は、推古天皇の一五年（六〇七）、小野妹子が遣随使となった時にさかのぼる。この時、妹子は四人の留学僧をつれていった。この制度は、寛平六年（八九四）の遣唐使の廃止まで続く。

それ以後、日本人の外国留学は途絶えた。幕末に至り西洋の圧倒的な物質文明に驚いた幕府や諸藩はオランダ・イギリス・ロシア・フランスに留学生を送りこんだ。

明治になって、大久保利通・木戸孝允など新政府の官僚たちは、政府機構や官僚制度を確立するため、外国の制度・技術を学ぶべきだと建議した。明治二年四月十七日に「海外旅行規則」が制定された。

この頃、政府は留学生について、次のような方針であった。政府の官費生三〇人、諸藩の留学生百八〇人（大藩三、中藩二、小藩一）、私費留学生は自由。年令は十七才〜二十五才。留学先は英・米・仏・プロシヤ（独）。他国では、オランダ・ベルギーの「工場・機械学」、ロシアの「建国の様子」、中国の「文物・制度・工芸」に限定して修学すべきであると考えていた。この考えは明治時代を通じて変わらなかった。

その後、学制の制定により留学制度は高等教育の学制

の中に組み込まれ、「海外留学規則」（明三・一二・二二）が制定された。同規則には、留学生は大学の管轄下に置かれ、大学から留学免許、外務省から「海外旅行免状」（パスポート）を受けることが定められている。

本格的留学とは別に、現職の官僚たちによるヨーロッパ事情の視察もしばしば行われた。その代表的な事例は明治四年に行われた日本政府視察団である。政府は十五大藩に二名ずつの海外視察員を派遣させた。鹿児島・山口・静岡・金沢・福岡・広島などの他に徳島・高知が含まれていた。徳島からは、山本正巳（徳島藩権小参事）、星合常恕（徳島藩士）が参加した。

明治初年の留学生数は、正確には判明しないが明治六年の政府調査では、在外留学生三五六人（公費二五九人私費九七人）となっている。

年代別に見ると、明治元・二年がそれぞれ一三人、三年一八七人、四年二一八人、五年八六六人、六年二三人、七年一〇人で、明治三・四年をピークに、六年末の官費留学制度打ち切りまで、五五〇人となる。留学先は、アメリカ二〇九人、イギリス一六八人、ドイツ八二人、フランス六〇人、その他ロシアや中国等三一人である。

アメリカ留学が最高の理由は、ヨーロッパより近いこと、ペリー以来アメリカからの来日者が最も多いこと、さらに先進国のヨーロッパ諸国や後進のロシアより新興国アメリカが、当時の日本にとって最も参考になると考えられたことなどがあげられる。

ご挨拶

当館第二回企画展示「蜂須賀家家臣・渡辺家資料展」開催中は、ご来館の皆様方より数々のご高評・ご高見を戴き、まことに有難うございました。

引き続き、第三回展示と致しまして「明治の留学―井上家文書を中心に―」を開催させていただきます。

明治初年、徳島から英国へ留学した若き徳島県人がいた。まだ十代の二人の少年は、井上麟太郎・辨治郎であった。当時のこととて、まさに徳島の黎明を求めての壮挙とも言うべき行為であったことでしょう。

今回の展示は、この留学に係る多数の文書の中から、特にその時代を語り、現代へのうつりかわりを、映しだすにふさわしい資料を選んでみました。

前回同様、貴重な、ご意見、ご教示等、お待ちしております。

大切な歴史資料をご提供戴きました井上家の皆様に、深く感謝申し上げますとともに、おりしも、この展示期間中に全国歴史資料保存利用機関連絡協議会（全史料協）全国大会が、徳島で開催されることもあり、この展示が各方面のご注目をいただき、ご期待に添うものとなりますよう、心より願っております。

平成三年十月二十九日

徳島県立文書館長

齋藤 智

表紙の写真

写真左側は井上辨治郎が明治八年（一八七六）に描いた少女像です。エッチングの原画を模写したのか、細かな筆の線によって描写されています。

写真右側は、井上麟太郎が持ち帰ったもので、明治七年（一八七五）にイギリスで発行された地図集の中にある日本の地図です。ほとんど現在の地図と変わらない姿をしていますが、よく見ると北海道はYESO（蝦夷）、東京はYEDO（江戸）になっています。

また、四国にはNAHAMOURA（高知県中村市のことか）という町だけしか記載がありません。

阿波とイギリス

阿波とイギリスの関係は、首尾よいスタートであった。慶応三年八月三日の夜、徳島城内で、藩主斉裕は世子茂韶を従えて、イギリス公使パークス、提督ケッペル一行に接見した。

このことに先だつて、二隻の軍艦が阿波の国に近寄ってきた。バジリスク号とサラミス号である。

バジリスク号は八月一日に、サラミス号は八月二日に小松島の根井港に投錨した。バジリスク号には公使パークスが乗艦していた。

先着のバジリスク号は、根井港に投錨して一昼夜不気味に静まり返って朝を迎えた。一夜のうちには海は荒れ模様となっていた。一日遅れで到着したサラミス号には、提督ケッペル、書記官アーネスト・サトウも乗艦していた。

イギリスの軍艦二隻の根井港への投錨は、阿波の殿様の招待によるものであった。しかし、パークスは油断はしなかった。招待側の様子を調べるために、日本語のよく出来るアーネスト・サトウを派遣することとした。

迎える徳島藩では、手落ちがあつてはならじと、港には何人かの藩士を待機させていた。アーネスト・サトウはこの者達の案内に従つて、根井の港から、降りしきる雨の中を馬上の人となった。

到着したところは、徳島市勢見の、とある寺院であった。この寺が一行の宿舎に予定されていたためである。この寺には既に藩の幹部が待

機していた。宿舎の下見と食事、それと八月三日に実現する藩主と公使との接見の席順などを協議決定し、アーネスト・サトウはこの寺に一泊した。

八月三日アーネスト・サトウは、阿波での初めての朝を迎えた。雨は依然として降っていた。昼にも午後にも止みそうにはなかった。

朝食後、彼は調達した数頭の馬とともに、根井の港へ急いだ。水は道々にあふれて、馬の足はなかば没した。

サトウは交渉の一切をパークスに報告、パークス一行が、徳島城へと、根井の港を出たのは午後の四時頃であった。雨はいよいよ激しく、サトウが朝たどった道の水量は一行の乗る馬の胸に及んだ。危険を冒しての行動であった。

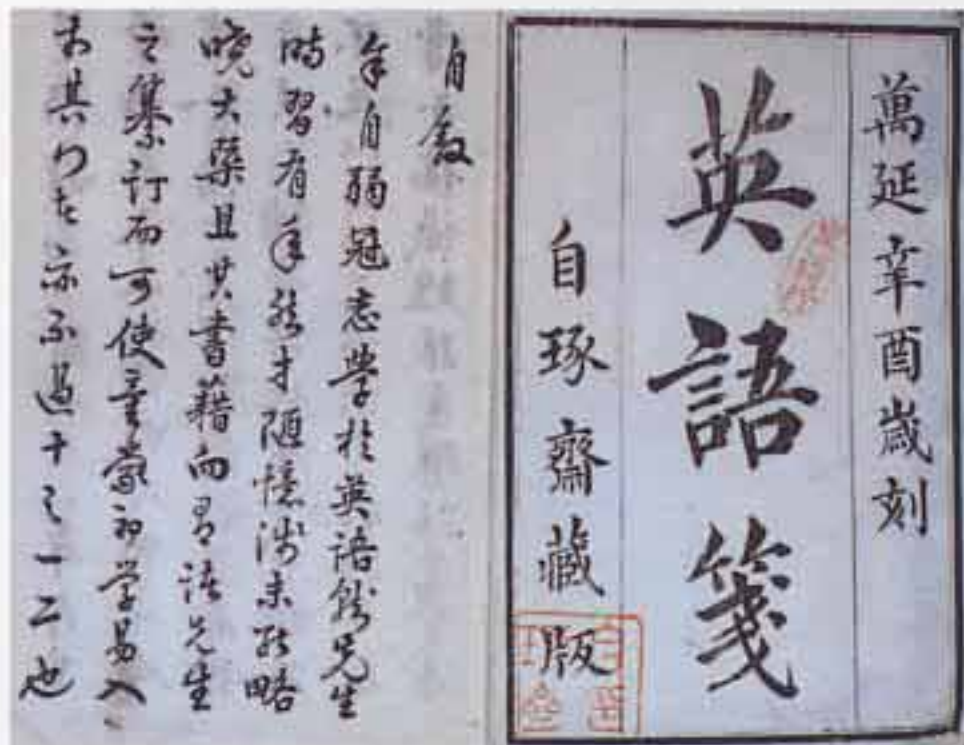
二時間ののち検分済みの寺に、一行はずぶ濡れで到着、ここで旅装を整える予定であったが、のこる城までの道中で、また濡れるので、カゴを用意することになった。しかし、手間どつて、公使パークスは激怒したという。

また二時間の後、一行のある者は馬で、あ

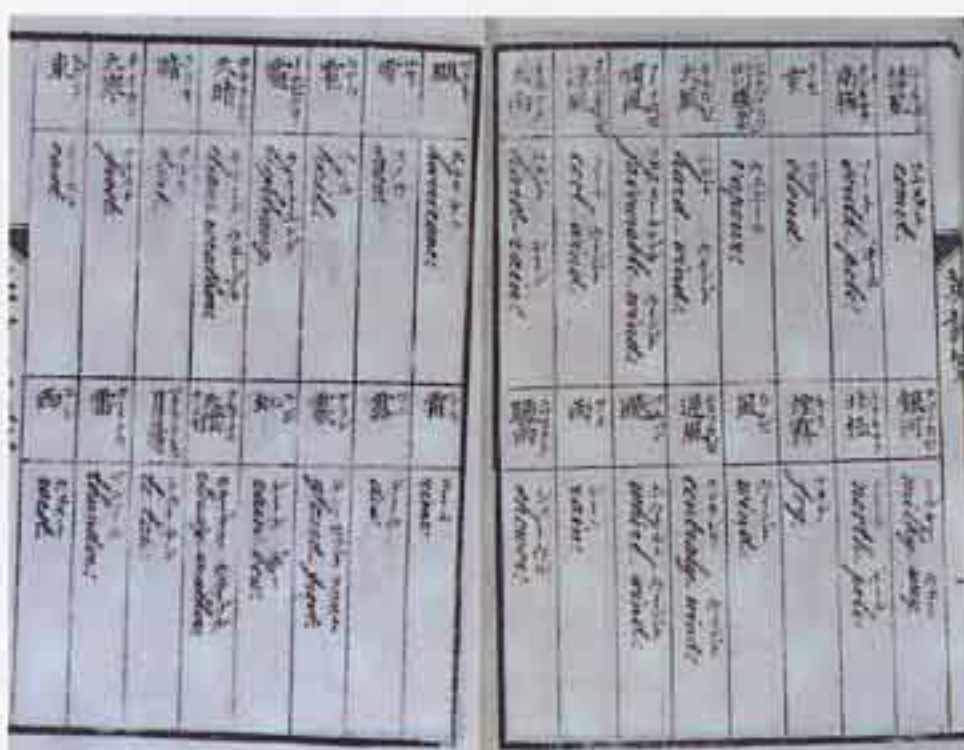
る者はカゴで城中へ向かった。一行は城中であり合わせのものに着替えて、ようやくのことで会見に及んだ。この会見に内容については、知り得ないが、パークスはしごく満足している。

あくる八月四日、一行は徳島藩兵の調練に立ちあい、のち眉山中腹の大瀧山に案内されて、ここで昼食をとる。この席で、斉裕は「自分は早く隠居してイギリスへ行きたい」と、アーネスト・サトウに伝えている。しかし、斉裕はこのときから半年後の一月十三日に病没する。世子茂韶は、六年後の明治五年一月二十六日、夫人斐子同伴でイギリスに向けて横浜の港を出航した。このとき、小室信夫とその子三吉が同行している。

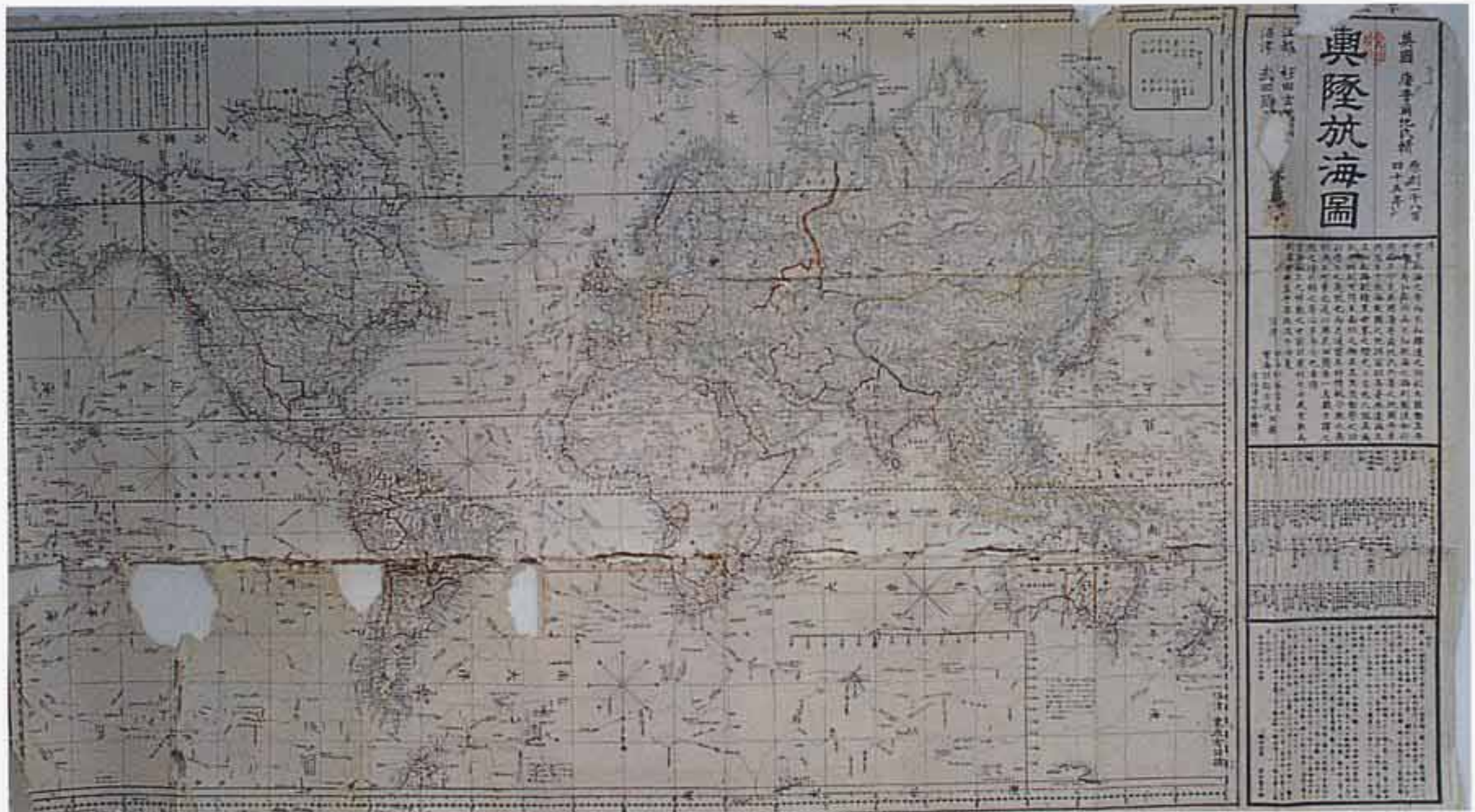
茂韶がイギリス留学しているとき、あいついで別掲のとおり、イギリスに多くの者が留学した。イギリスの進んだ社会で新しい知識の吸収をするためであった。



英語箋 (内表紙)



英語箋 (内容)



奥地航海図(安政9年) 158×90

奥地航海図について

奥地航海図の奥地とは全世界・全地球の意味を持ち、文字どおり世界航海の為の図面である。安政五年（一八五八）駿河国（静岡県）沼津の蘭医師武田簡吾の手によって作成された木版の世界地図である。この原画はイギリス人の庸普爾地氏（イヨンビュルチー氏）が一八四四年に作ったものとされている。メルカトル図法による、航海用の世界地図としては幕末の代表的なものであり地理学上高く評価されている。

この地図は、嘉永六年六月に浦賀に来航したアメリカのペリー艦隊に続いて、同年七月長崎に来航したロシアのプチャーチン艦隊の旗艦ディアナ号の船室に掲げられていたという。ディアナ号は翌安政元年十一月下田沖で地震にあり、沈没したため、沼津近郊の戸田村で代艦の建造を行った。このとき武田簡吾がこの地図を閲覧し、邦訳出版したものであるといわれている。

校閲者に、杉田玄白の孫に当たる洋学者の杉田玄端、協力者に伊豆葦山代官江川太郎左衛門門下の沼津藩士小林信近と服部純があたっている。この図は当時沼津に支店を経営していた井上家が購入したものだろう。値段は、色分け刷り、一部が一兩一分と値段の張るものだった。後、英国へ留学する驕太郎と辨治郎もこの地図を見て世界へ胸を躍らせていただろう。

参考文献

- 「静岡県史」資料編十五（近世七）
- 「鎖国時代日本人の海外知識」
- 「沼津市明治史料館通信 第十号」

井上十吉	イギリス	明治六年～明治一六年	一八六二～一九二九（文久二～昭和四） 語学修行のため留学。治金を修める。 著作多数
井上省三	イギリス	明治六年～明治一三年	一八六二～一九二九（文久二～昭和四） 語学修行のため留学。治金を修める。 著作多数
高島五郎	ヨーロッパ諸国	明治六年～明治七年	一八二五～一八八四（文政八～明治一七） オーストリア博覧会等視察 海軍中将
小室三吉	イギリス	明治五年～明治一七年	不明～一八九一（不明～明治二四） 弟の十吉ならびに、驍太郎・辨治郎とともに留学 東京英語学校などで教鞭をとる
小室信夫	イギリス アメリカ	明治五年	一八六三～一九二一（文久三～大正一〇） 父信夫とともに洋行、経済学を学ぶ 東京の実業界で活躍
蜂須賀斐子	イギリス	明治五年～明治七年	一八三九～一八九八（天保一〇～明治三二） 茂詔とともに洋行し、視察を終え帰国 民選議員設立建白の建議を行う
蜂須賀茂詔	イギリス	明治五年～明治一二年	一八五二～不詳（嘉永五） 夫茂詔とともに洋行 健康を理由に明治七年帰国・同年離婚
石神七朗	イギリス	明治四年～不明	一八四六～一九一八（弘化三～大正七） 語学・政治・経済学等を学ぶ 貴族員議長・文部大臣などを歴任
露木徳五郎	アメリカ	明治四年～明治六年	一八五二～不詳（嘉永五） 夫茂詔とともに洋行 健康を理由に明治七年帰国・同年離婚
山本正巳	アメリカ	明治四年	一八四六～一九一一（弘化三～明治四四） 星合とともに海外視察 各地裁判所長などを歴任
星合常恕	アメリカ	明治四年	一八四一～一八七五（天保一二～明治八） 藩の海外視察員として洋行 明治七年名東県大参事

この表では、今回展示の井上驍太郎、辨治郎については、別にとりあげているので、はぶきました。

明治初年 阿波の洋行者

氏名	洋行先	期間	概要
原 覚蔵	ヨーロッパ諸国	文久二年	一八三五～一八七九(天保六～明治一二)幕府遣欧使節随方として随伴、藩最初の公費海外派遣者 絵画教育者
芳川 顕正	ヨーロッパ諸国 アメリカ	明治三年	一八四二～一九二〇(天保一三～大正九)伊藤博文に従い財政事情などを視察 司法・内務・通信・文部大臣等歴任
石川 権五郎	アメリカ	明治三年	生没年不詳 航海術訓練のため留学、藩最初の留学生
鳴門 一郎	イギリス	明治三年～明治八年	一八四八～一八九一(嘉永二～明治二四)海軍兵学寮から航海学修業のため派遣、海軍唯一の外国留学者
長井 長義	ドイツ	明治三年～明治一七年	一八四五～一九二九(弘化二～昭和四)ベルリン大学で薬学・化学を学ぶ 薬学博士・日本薬学会会頭
森 甚五兵衛	イギリス	明治三年～明治七年	一八五一～一九一五(嘉永四～大正四)大学南校より留学。物理・化学を学ぶ 帰国後工部寮に入る
武谷 福三	イギリス	明治三年～不明	生没年不詳 大学南校より森とともに航海術修行のため留学
高 良二	ヨーロッパ諸国	明治三年～不明	一八四七～一九二一(弘化四～大正一〇)大学南校より洋学修行のため留学 「独和辞書」など多数執筆
山田 要吉	アメリカ	明治三年～明治八年	一八五一～一八九二(嘉永四～明治二五)大学南校より工学研修のため留学 工学博士、東京帝国大学工科大学教授
内藤 類次郎	ヨーロッパ諸国	明治三年～明治七年	一八三九～一八九〇(天保一〇～明治二三)藩命により洋学修行のため留学 外務省・工作局・会計局等に勤務
黒部 鉉太郎	ヨーロッパ諸国	明治三年～不明	生没年不詳 藩命により内藤類次郎とともに洋学修行のため留学

学校と生活

留学中の井上麟太郎と辨治郎は、百冊ほどの洋書を手に入れ勉強をしていた。それらの洋書のほとんどに、手に入れた日付、持ち主の名前、贈ってくれた人の名前等のメモが記されている。

それらの中にユニバーシティ・カレッジ・スクールから麟太郎が優等賞として贈られたというシールが表紙の裏に張られている本が二冊ある。一冊は、作文の授業でもらった昆虫の本、もう一冊は、地理の授業でもらったプロテスタント運動史の本である。ユニバーシティ・カレッジ・スクールは、日本からの留学生の多くが学んだ学校で、徳島県から一八七〇年（明治三）以来ロンドンに留学していた森甚五兵衛も一八七二年（明治五）十月から一年間同校で化学・

実験を学んでいる。

また麟太郎・辨治郎より一年前にロンドンへ留学していた元藩主の蜂須賀茂韶から本が贈られている。茂韶は、一七二二年に作られた「ベスト流行年代記」を一八七五年（明治七）辨治郎に贈っているサインが残っている。

辨治郎に本を贈った人物として、ほかに伊賀陽太郎がいる。伊賀は、高知の武家出身で、維新期に戊辰戦争で北陸を転戦している。その後すぐロンドンに留学し、十年間という長期滞在しており、帰国後男爵となっている。辨治郎らとともにイギリスに留学した徳島県の井上十吉は、その日記の中で、国教派の牧師であるハム家で十吉・陽太郎・辨治郎が一緒

に下宿していたことを書き残している。留学経験の長い陽太郎は、若い辨治郎をかわいがったのであろう。陽太郎の贈った英語辞書、ロビンソン・クルーソー等の読み物が残っている。

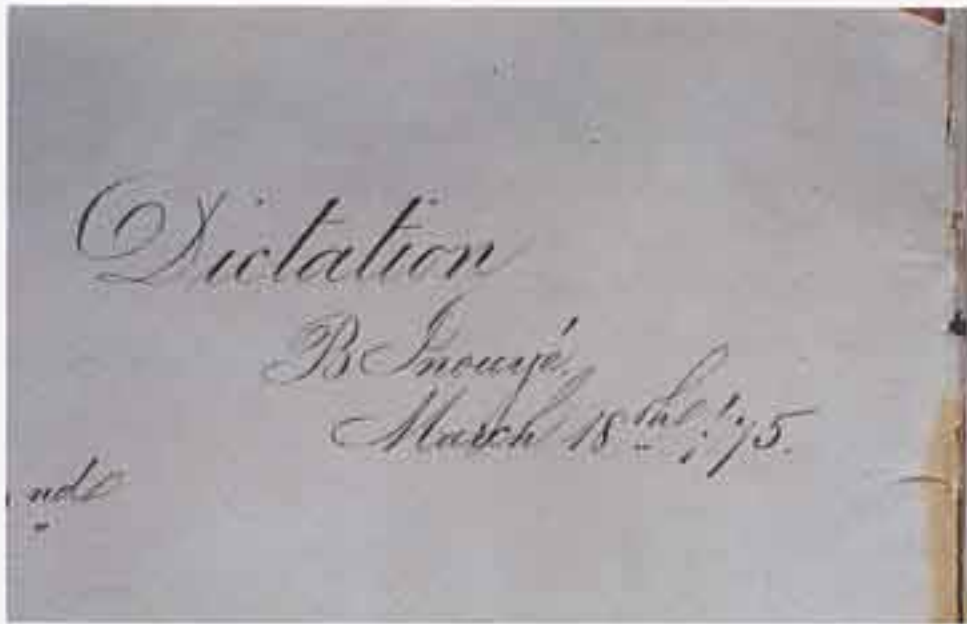
辨治郎と麟太郎が何を目的に留学したかは定かではない。しかし留学中の勉学の史料としてほかに三十冊ほどの帳面がある。

麟太郎のノートには、英語の勉強のほかに簿記の練習帳がある。麟太郎の図書の中には、英語・数学・フランス語・地理・歴史等のほかに簿記の本があり、商家である井上家の後継ぎとしての意識があったのだろう。

辨治郎のノートには英語・フランス語・ラテン語・数学のノートがある。英語では書取・作文に力を入れていたようである。



ノート



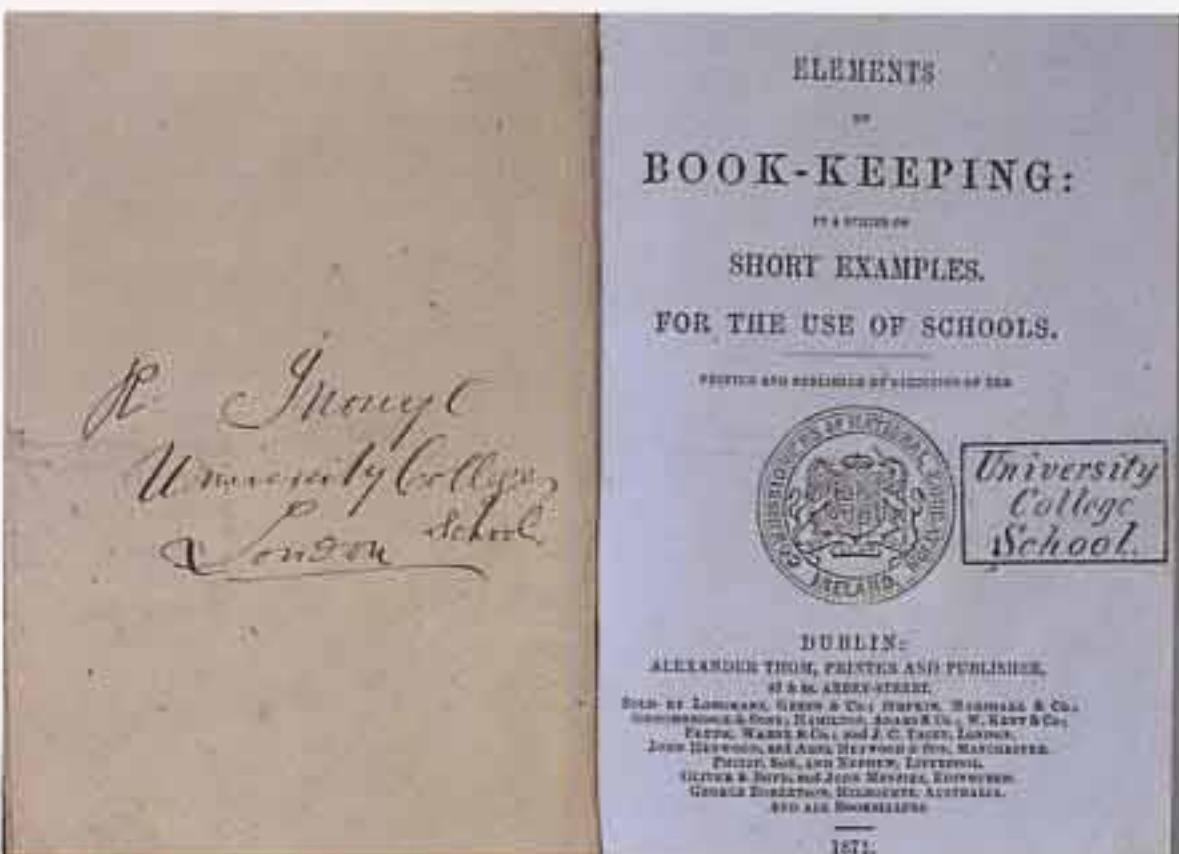
ノートにあるサイン



UCSの本



表紙の裏



Book keeping

帰国後 辨治郎は すぐに亡くなり、 麟太郎は 藩から井 上家が買 い受けた 鵬翔丸の 遭難（明 治一四年） などの困 難に立ち 向かった。

井上家について

井上家は、鹿島屋の屋号のもとに、回船業・藍塩の他国売りを家業とし、代々すぐれた決断力で成功してきた。また、進取の気質に富み、新田開発などの事業を行い、幕末に至る二百数十年の間、徳島藩を代表する豪商であった。

鹿島屋・井上家の本拠は阿波国小松島浦（現小松島市）である。沼津と江戸に出店を構え、次いで淡路・土佐両国へと商圏を拡大した。

鹿島屋中興の初代井上甚右衛門は「専ら船渡世ヲナシ数艘ノ大船ヲ以テ自ラ乗組諸産物ヲ買積、諸国へ運搬回漕ノ道ヲ開キ盛大ニ起業」している。

初代井上甚右衛門は延宝九年（一六八一）に没しているから、井上家の起業は十七世紀中頃であろう。

二代井上甚右衛門は「数艘ノ大船ヲ増シ、以テ国産藍玉塩等ヲ買入シ回漕ナスニ、其ノ売払ノ便宜ヲ謀リ駿河国沼津駅ニ出店ヲ開」いた。駿河国沼津宿への出店こそ、問屋卸から、新着想の振売・直売の開始であった。沼津の出店は繁盛した。しかし三代甚右衛門は晩年に火災に遭い、ことごとくを焼失、大被害をこうむった。

四代甚右衛門は若年で相続し、賢母の薫陶のもと「母ト共ニ沼津出店諸売場へ回勤ナシ、家事取締役又七ケ年間ニシテ繁昌スルコト先代ニ倍シ」江戸に出店二店を構えた。関東へ商圏を拡大したのである。更に、淡路・土佐両国への売場拡大、また、大阪堂島の米相場への参入と、積極的な多角経営はことごとく成功した。

五代甚右衛門は、「関ノ東西ハ勿論、東ハ奥州ニ至ル諸大名拜命」の用達職のほか、大名貸小名貸と金融業にも成功している。

辰巳新田の開拓に着手するのは、七代甚右衛門である。辰巳新田の面積は、地租改正の当時、実測で百二十三町七反余であった。

ところで、明治維新期の鹿島屋の経営にあたったのは九代井上三千太であった。三千太は先代からの「業ヲ固守シ諸国巡回ヲナシ、万端駆引指揮シ尚家業隆盛ヲ計ラント」するのと同時に、藩主茂韶の江戸出兵の兵糧調達を引き請け、このため沼津・江戸両出店を総動員した。この結果は「商業ハ不行届・店々ニ於テ不取締モ相生

シ」商勢にかけりがあったが、明治五年十月、藩船・戊辰丸を三万両十年賦で購入鵬翔丸と改名し、海運業に新基軸を求めた。

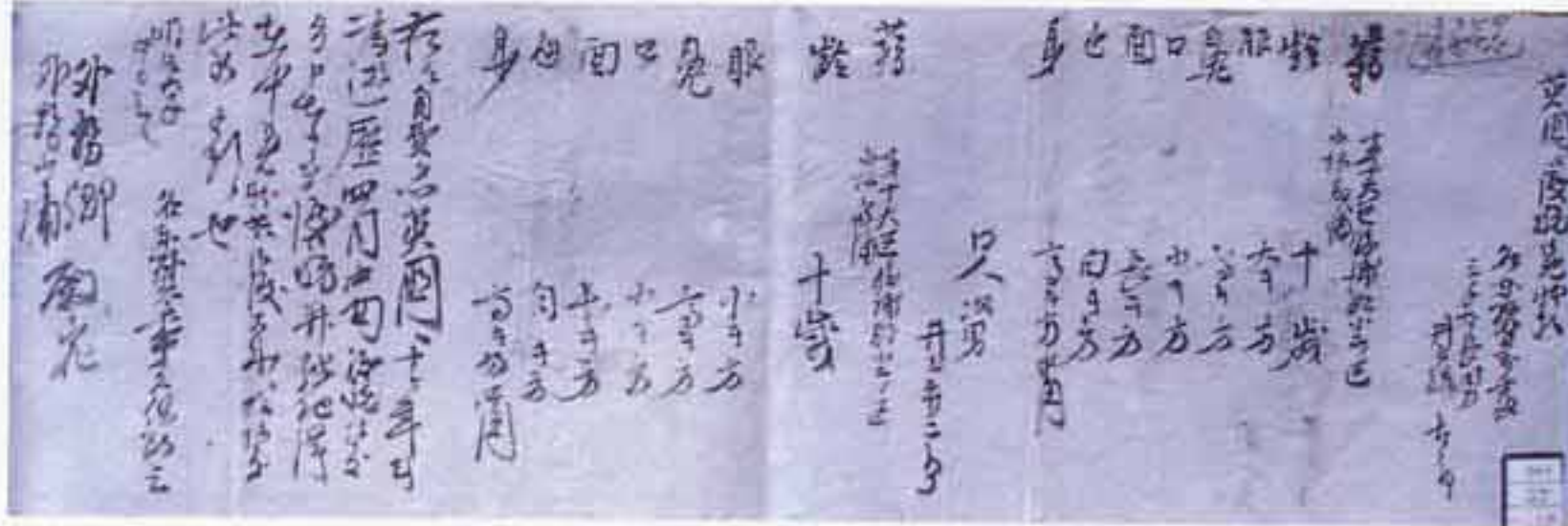
翌六年、まだ十代前半の長男驥太郎と弟の辨治郎を英国へ留学させた。当時、英国には前年の一月から蜂須賀茂韶も夫人同伴で、ロンドンに滞在していた。

三千太は子供たちにすべてをかけて、御一新の世を生き抜く計画であった。しかし、辨治郎は留学先で体調をくずし、学業なかばの明治九年十一月帰国、次の年の八月九日十八歳で没した。

驥太郎は足掛四年の留学のち明治十年八月帰国、父三千太のもとで鵬翔丸による海運業に家運をかけたが、鵬翔丸は明治十四年十一月、陸奥国水戸郡鯨村港（現八戸市）で激浪のため沈没する。このことは、井上家にとっては、大きな痛手であった。驥太郎は、このときから十二年余ののち、明治二十

七年九月十三日三十五才で病没する。

三千太が期待した二人は余りにも若く、この世を去った。その後、井上家は辰巳新田の経営に専念し、昭和二十年にいたった。



留学願

鹿島屋中興の初代井上甚右衛門は「専ら船渡世ヲナシ数艘ノ大船ヲ以テ自ラ乗組諸産物ヲ買積、諸国へ運搬回漕ノ道ヲ開キ盛大ニ起業」している。

ところで、明治維新期の鹿島屋の経営にあたったのは九代井上三千太であった。三千太は先代からの「業ヲ固守シ諸国巡回ヲナシ、万端駆引指揮シ尚家業隆盛ヲ計ラント」するのと同時に、藩主茂韶の江戸出兵の兵糧調達を引き請け、このため沼津・江戸両出店を総動員した。この結果は「商業ハ不行届・店々ニ於テ不取締モ相生



留学時のかばん

展示史料目録 井上家

史	料	名	年	代	大きさ(cm)	請求番号
壁面ケースA						
1	輿地航海図		安政5		158×90	洋書93
2	The Modern Atlas of the Earth		1875		27×34	洋書95
3	Cyclopaedian Atlas		1863		22×36	洋書96
壁面ケースB						
4	女性像 (デッサン)				48×38	
5	風景 (England) (デッサン)		1873, 11, 28		53×36	
6	少女像 (デッサン)		1874		54×36	
7	手 (デッサン)		1875		47×59	
8	A Journal of The Plague Year		1722		13×19	洋書11
9	On the Origin and Metamorphoses of Insect		1874		13×19	洋書30
10	Elements of Bood-Keeping		1871		11×17	洋書38
11	British Postal Guide 75		1875		13×20	洋書60
12	The National Gallery		1875		14×21	洋書63
13	かばん				86×42×47	
展示ケースA						
14	英国へ渡航御免願		明治6		44×15	99-1-37
15	学資金受取証		明治10		16×15・21×16	9-2-11
展示ケースB						
16	ロンドン市 地図		1871		95×72	洋書92
展示ケースC						
17	ウェブストル氏スペリング独稽古		明治18		12×18	和書2
18	英語箋 上下		万延1		12×18	和書9・10
19	英学速成校校外生徒日課		明治18		12×18	和書11
展示ケースD						
20	簿記帳				20×25	帳面5
21	英習字ノート		1874		19×23	帳面12
22	ラテン語練習帳		1874・10		18×23	帳面16
23	ディクテーションノート		1875・11		18×23	帳面17
24	フランス語練習帳		1875・2		19×24	帳面20

※会期中、一部展示替えをすることがあります。

辨治郎と洋画

井上辨治郎が留学中に進もうとした道の中に洋画の道があったことは、確かなことだろう。辨治郎が手に入れた洋書の中にもイタリア絵画の歴史の本や、ナショナルギャラリーの雑誌などがあり洋画に対するあこがれが見える。

徳島で洋画に手を染めたのは、文久二年（一八六二）の徳川幕府遣欧使節に賄方で随行した原覚蔵である。原は藩の銃卒の家に生まれたが、弘化四年（一八四八）藩絵師守住貫魚について絵の道に入った。その後藩の銃卒として江戸詰だったが、二十七才で徳島藩初の公費による海



History of Painting in Italy

外派遣者となった。洋行中、原は多くの洋画の模写やスチッチをしていたようである。帰国後、明治三年（一八七〇）からは教育界に入り、徳島県の美術教育の先駆者となっている。

辨治郎は、留学当初からイギリスの風景画など鉛筆によるデッサンを残しているが留学二年目の明治七年（一八七四）から本格的に絵を勉強し始めたようである。手足など体の一部分や石膏像の鉛筆によるデッサンという洋画の基礎中の基礎から入っている。その後絵画エッチングの鉛筆・コンテによる模写まで進んだが、明治九年（一八七六）には体をこわし、志半ばで隣太郎ともはなれた一人帰国の途についている。さらに翌十年八月には東京で亡くなっ



手のデッサン

てしまう。留学当初に比べ基礎を学んだ辨治郎の筆はずいぶん進歩していた。



英国風景



書を読む少女図

辨治郎がイギリスで描いた作品の一つ



世界地図

驎太郎がイギリスで入手し、帰国の折に持ち帰ったロンドンで発行された地図

第3回展示 **明治の留学** —井上家文書を中心に—

発行 平成3年10月29日

編集・発行 徳島県立文書館 〒770 徳島市八万町向寺山 TEL0886-68-3700

印刷者 (株)芳川堂印刷所 〒770 徳島市中通町1丁目 TEL0886-22-4915